

(十二) 廣山寺 福山市神辺町東中条

神辺町東中条にある高野山真言宗の寺院で、山号を「玄洞山」と称する。
福山市神辺民俗資料館のホームページに次のように紹介されている。

標高一二五mの山腹に位置し、唐に渡った弘法大師・空海が帰国後に建立したと伝えられ、その時、白檀（びやくだん）インドネシア原産の常緑高木）の木を刻み、本尊である地藏菩薩を作り安置したとされています。

その後、盛衰を経て正応元（一二八八）年に讃岐国「善通寺（ぜんつうじ）」の僧侶・宥鑊（ゆうばん）が中興したとされ、この時宥鑊は、弘法大師の靈跡を慕い尾道「西国寺（さいごくじ）」府中「栄明寺（えいみょうじ）」上下「法身院（ほっしんいん）」を同時期に再興し、「廣山寺」とあわせて「備後四院（びんごしんいん）」と称されました。

「水野記」によれば、「古来、讃州（さんしゅう）善通寺の僧・宥鑊の建立の地なり。古くは十二寺、寺領百五十貫あつたが、天文年間（一五三二〜一五五五年）に衰微して三寺となり、永禄六（一五六三）年に毛利氏から十五貫を寄進されるが、福島氏により没収された。」と記されています。また、文明三（一四七二）年の古記録には「二ヶ寺七坊の末寺または塔頭（たつちゅう）同一山内にある小寺院。大寺に所属する別坊」を有していたことが記されているそうです。近年の開発で、周辺から鎌倉末期〜南北朝時代頃のものと思われる多数の五輪塔を出土しています。昔は真言宗でも大覚寺派でしたが、現在は高野山に改派しています。



玄洞山広山寺



本 堂



立派な茶室を望む

一 茶山日記にみる廣山寺

当中中条には詩友が多く、度々訪れている。その道中で詠んだ詩には「十七夜還自中條」（黄葉夕陽村舎詩前篇卷二）「丁屋路中」（同卷三）「中條帰路」（同卷四）などがある。

足繁く訪れたのが、河相君推の松風館であり、大空上人のいる遍照寺である。さらには、松井子璐、河相子蘭、篁大道などの詩友も訪ねている。

茶山はさらに足を延ばして、広山寺にも訪れたことを日記に残している。

享和三年（前夜松風館へ泊る）

閏19 雨 同会広山寺作和歌

夜帰家 君推笨車籠送

途中得五律一首（懷紙 作あり）

享和三年（一八〇三） 茶山五六歳

○ 前日河相君推の松風館で詩会があり、そのまま松風館に泊まる。

○ 広山寺で引き続き詩会を開くことになったのであろう。雨の中を広山寺に赴いて和歌を作った

高山寺に登る途中で五言律詩一首を懐紙に書いた
○ 夜になって家に帰る (河相) 君推が車と籠で送ってくれた。

とある。次の詩が懐紙に書かれたとされる。

上廣山寺途中作 未収 (黄葉夕陽村舎詩に掲載されていない)

甘雨 荒村路	甘雨 荒村の路
佳招名寺期	佳招 (かしょう) 名寺に期するを
病軀常艱歩	病軀 常に艱歩 (かんぽ) するを
幽事頓忘疲	幽事 頓 (とみ) に 疲を忘る
石膚青將滴	石膚青く 将に滴 (した) たらんとす
峰皺翠更滋	峰皺 (ほうしゅう) の翠 更に滋し
澗沙泥不滑	澗沙 (かんしゃ) の泥 滑らず
繖履好追隨	繖履 (さんげき) 追隨を好とす

甘雨 ほどよい時に降る雨。 期 約束して会う。 艱 むずかしい 苦しむ。 幽事 奥深くても静かなさま。 峰皺 山が重なったさま 山並み。 繖 傘、きぬがさ、上方に絹を張り、また、四方にたらしめぐらせた傘。 履 はきもの 下駄

(大意) 恵の雨が降るひなびた村の路に登る。名のあるお寺から鄭重なお招きがあった。病がちで日頃歩くにも難儀をしているのに、詩会が楽しみで道すがらのしじまに疲れを忘れてしまうほどだ。岩肌に張りついた青苔から雫が滴り落ちており、山並みの翠は一層濃さを増している。谷川に沿った小径は、滑る心配もない。傘を差し下駄を履いて案内の者についていくのも いいものだ。

この書が次の写真である。文末に「上廣山寺途中作」とある。



この作品が現在、所在不明なのが悔やまれる。しかし、日記とも適合しているので、茶山が広山寺へ
の途中で詠んだ詩であるとしてもいいだろう。(林多恵子さんより提供)

二 茶山日記から見る広山寺との交流 (林多恵子さんより提供)

寛政十二(一八〇〇)	5/17	晴且雨	広山寺住持某携弟子義純
享和 三(一八〇三)	閏 1/9	雨	同会広山寺作和歌
			途中得五律一首
		夜帰家	君推笨車籠送
文化三(一八〇六)	3/27	広山上人	福島仁助来
文化五(一八〇八)	9/27	広山寺	文節 二介来
文化六(一八〇九)	8/8	広山寺上人	福島二助来
	8/3	広山寺難僧智猛入塾	*智猛文化一三年には上人とある
	8/7	智猛帰山	

文化八（一八一） 4/15
文化十（一八一三） 3/20

広山寺上人 円通寺主 車仁助来
光師 孟昌 竹田 平松同赴円通寺韻 過茂市広山寺車屋使人要
帰路遂過飲至曉

三 同じような詩が他にも存在

茶山詩集「黄葉夕陽村舎詩」に掲載されていない詩の中に次のような詩がある

「中條山中 赴黄龍寺詩会」		菅茶山遺稿	
甘雨荒村路	甘雨 荒村の路	黄龍寺	黄龍山遍照寺
佳招名寺期	佳招（かしょう） 名寺に期するを		
病軀常 [○] 懶出	病軀 常に出ずるを懶（らん）す	懶	いとう 怠ける
幽事頓忘疲	幽事 頓（とみ）に 疲を忘る		
石腹 [○] 青將滴	石腹青く 将に滴（した）たらんとす		
峯皴 [○] 翠更滋	峯皴（ほうしゅん）の翠 更に滋し	皴	しわ（東洋画で山や石のひだを描く技法）
澗沙泥不滑	澗沙（かんしゃ）の泥 滑らず		
傘履好追隨	傘履（さんげき） 追隨を好とす		

○印を付けたのが、「上廣山寺途中作」と異なっている部分である。

「艱歩↓懶出 石膚↓石腹 峰皴↓峯皴 繖履↓傘履」でその意味はほとんど同じと考えられる。

先の詩「上廣山寺途中作」は、享和三年（一八〇三）閏一月九日、広山寺への途上で詠み懷紙に記していた。後日「中條山中 赴黄龍寺詩会」と題を変えて、詩の内容も一部書き換えたと考えられる。

【ちよつと休憩】『菅茶山遺稿集』について（茶山遺稿 柏崎順子著 大平文庫より）

『菅茶山遺稿集』は茶山を篤く慕っていた伊沢蘭軒の旧蔵本である。この書物には『黄葉夕陽村舎詩』に載せられていない茶山の詩が書き写されている。

この書は文政五年（一八〇八）黄葉夕陽村舎南寮において、茶山弟子「山室子彦」のために「絶逢子惟穆清風」（不詳）によって書き写されたものである。この山室子彦所蔵本を、伊沢蘭軒の嗣子榛軒達四名が分担、書き写したものが伊沢蘭軒所蔵本として残され、明治以後世に出て書誌学者和田万吉氏の手にすることになり、茶山研究が進んだと言われている。

四 茶山の推敲し変更した結果ではないか

茶山は書も多く残している。その書と詩集「黄葉夕陽村舎詩」の詩が異なっているものもある。茶山は書き留めた詩を知人に批評してもらい、時には書き換えたりもしている。都講時代の頼山陽に批評や点検させたという話はよく知られている。

書と詩集と異なっている例として

「除日小集招恵充上人」（黄葉夕陽村舎詩前篇卷八―九）と題する詩は

會計家期歳抄
催科討帳人奔擾
算還詩債愧無才
招得已公論下掃

會計は家々（かか）歳抄を期す
催科（さいか）討帳（とうちよう）人々奔（はし）り擾（さわ）ぐ
詩債（しさい）を算へ還すに 才の無きを愧（はじ）る
已公（しこう）を招き得て 下掃を論ず

となつてゐるが、「菅茶山ゆかりの人々」（菅茶山記念館発行）に掲載された書では

歳計家々至此窮
催科討帳走西東
算還詩債愧才拙
欲定敲推請已公

歳計は 家々 此窮（しきゆう）に至る
催科討帳（さいかとうちよう） 西東に走る
詩債を算（かぞ）へ 還（かえ）すに 才拙（つたな）きを愧（は）ず
敲推（こうすい）して定めんと欲するも 已公（しこう）に請（こ）わん

と紹介されている。内容はほぼ同じものである

茶山は詩を詠んでも後日に見直したり、知人に感想を求めている。詩集『黄葉夕陽村舎詩』草稿には幾度となく書き直した跡が見られし、『黄葉夕陽村舎詩』の欄外に他者の感想や意見が書き込まれているのを見ても、茶山の詩に対する熱意とこだわりが見えてくるのではないだろうか

【付録】 伊沢 蘭軒（いざわ らんけん、安永六年（一七七七年）～文政十二年（一八二九）

江戸時代末期の医師、儒者。名は信恬、号は蘭軒、通称は辞安、堂号は酌源堂。

備後福山藩の藩医の子として江戸の本郷に生まれた。儒学・医学・本草学を学んで福山藩に仕えた。著名な漢詩人菅茶山や頼山陽、狂歌で知られる幕臣の大田南畝、書家の亀田鵬斎、考証学者の狩谷棧斎など多くの文人と親しかった。藩主（阿部家）の信任が厚く、晩年に病で足が不自由になった後も特例として輦で城内に出仕することを許されたという。（輦 れん てぐるま）

文化元年（一八〇四）五七才の時、藩主阿部正精の命で江戸出府した直後、病臥した茶山を蘭軒が見舞ったのが初対面である。親子ほど年の離れた二人であったが、すぐ親しくなったようで、茶山が回復したら共に舟遊びもしている。それ以来、江戸在府中はもちろんのこと、遠く離れていても書のやり取りを頻繁にしている。

伊沢 蘭軒については森鷗外著「伊沢 蘭軒」に詳しい。

参考文献

「黄葉夕陽村舎詩」復刻版

児島書店

「茶山遺稿」

柏崎順子著 大平文庫

『黄葉夕陽村舎詩』草稿

広島県立歴史博物館展示第八回展示資料

高山寺

福山市神辺民俗資料館のホームページ

伊沢蘭軒

『ウィキペディア』